

# 輝く介護

第23号

2012年(平成24年)

3月15日発行

特定非営利活動法人 かまくら地域介護支援機構  
連絡事務所 〒247-0061 鎌倉市台 2-8-1 台在宅福祉サービスセンター内  
Tel : 0467(46)0788 Fax : 0467(46)0059  
<http://www.kamashien.com> e-mail : [jimu@kamashien.com](mailto:jimu@kamashien.com)

## 劇団かまくら座 旗揚げ公演！！

### 介護劇「私は、このままこの家で暮らし続けたい」 ～「その人らしく」を笑顔で支えるしくみづくりを～

「地域包括ケアとは何かを視覚に訴えて分かりやすく表現したい！」そんな思いから、日頃介護に携わっている仲間たちが集まって介護劇に取り組みました。学生時代に演劇部だったり、劇団活動に関わっていたりという人も少しはいましたが、ほとんどが演劇初めての素人劇団。さて、どうなりますことやら・・・

かまくら地域介護支援機構の活動も年々幅を広げ、少しずつ地域の中に浸透し多くの方々のご理解・ご協力を頂けるようになってきました。平成11年の機構発足当時より今日まで一貫して変わらない活動の一つに「医療と福祉の連携は必須」と考え「顔の見える関係作りに力を注いできた」ことが挙げられます。更に近年は「地域包括ケア」の考えが重要視されるようになりました。医療・福祉の分野で働く多職種、自治会、民生委員、地域の助け合い活動などが地域で生活する要援護者の方々に対して協同で助け合っていこうという考え方です。

この「地域包括ケア」はなかなか難しく、地域の方々に一層のご理解を頂く活動の一環として当支援機構は、介護劇「私は、このままこの家で暮らし続けたい」を企画・制作し市主催の“介護フェア”で上演することにしました。初めての試みであり素人の集まりの中で手さぐり状態でしたが、役者・裏方含め22名の情熱で昨年12月、100名を超える観客を前に笑いを誘いながら見事演じ切りました。

日頃専門職として働く出演者たちにとっては、忙しい仕事の合間の少ない練習時間でしたが、劇を観た人たちからは「面白かった。」「こういうサービスもあるのね。」「身近に同じような人がいて身につまされた。」など様々な感想を頂きました。今回の劇団かまくら座の旗揚げ公演は大成功と言えるでしょう。今後も地域の皆様に一層お役に立てるようタイムリーに情報をお届けしたいと思います。



担当者会議の1場面

# 食支援サポーター 養成講座

当機構では、高齢者など摂食や嚥下に障害のある方が、最後まで美味しく食べられる調理方法、食形態、介護等について学び、食支援サポーターとして活躍できる人材養成を目指して、12月10日～2月18日にかけて5回シリーズの講座を開催しました。

受講者は、歯科医師、ケアマネ、栄養士、ヘルパー、民生委員等医療・介護・福祉等に携わる延べ165名でした。講話内容の概略を紹介します。

- 第1回は、地域栄養ケアピーチ厚木の管理栄養士 松崎真理子氏から厚木市近隣で訪問栄養指導を中心に栄養ケア活動を実践してきた活動内容と実施手順の報告がなされました。依頼の7割が摂食・嚥下機能の低下であり、「口から食べられなくなること」への不安が、介護する側される側共に強く、医師・ヘルパー等各職種との共通認識が重要との事でした。
- 第2回は、看護師 佐藤郁子氏が関わったアルツハイマー型認知症 72歳の女性の事例を挙げて問題点が提示されました。家族等への精神的な援助も必要となる。口の中を清潔に保つこと、排便のコントロールが最重要との事でした。管理栄養士 島田直子氏、言語聴覚士 上西奈緒氏からは、今の高齢者はメタボと低栄養が混在しているが、周囲は気付いていない。好きな物しか食べない傾向を改め、低栄養の予防が急務との事でした。
- 第3回目は事例報告で、1例目は歯科医師 金子正樹氏の話で、市内在住の68歳、要介護1の男性の時系列的な記録について詳細な報告がなされました。口腔内の環境改善が生きる力を与える糧となるとの内容でした。2例目はケアマネジャー 川原綾子氏からの、嚥下性肺炎で体力が衰弱した要介護4、86歳女性の入退院を繰り返している事例で、一番肝心の食の支援に関する指導がなされていない事、病院の様な医療中心の所では、食に関する事は言いづらい等の問題提起がありました。
- 第4回は、管理栄養士 田村須美子氏の調理実習を伴う講演でした。32年半の保健所勤務の後、身体障害者施設（さがみ緑風園）に移って驚くことが多く、食欲を起こすため、形や色が大事であることから発案したのが、「形そのままソフト食」。調理室では、圧力なべを使って「牛スジ肉と大根」「さんまの生姜煮」を作り、骨やスジまで舌でくずせ、歯ぐきでつぶせるおかずを作り試食しました。
- 第5回は、時田純氏が理事長を務める特別養護老人ホーム 潤生園の話で、施設の実態はターミナルケア1割、9割は認知症で、嚥下障害を持つ人も多く、低栄養になりやすい。口で食べて食欲本能を満たし、味覚等五感を通して大脳を刺激し生きる力と希望を与えることが大切と説かれました。かつてNHKの連続TVドラマ「おしん」が終了して1週間の内に10人が息を引きとった例を挙げ、希望は「命を繋ぐ糧」であると話されました。高齢者の終末期の病理と栄養管理の在り方について、死に馴染んでゆく、自然な経過で看取るのが基本との事でした。時田氏の終末期への思い入れややさしさは、講座の最終章にふさわしい、人間愛を漂わせておりました。



## 第14回医療と福祉のネットワーク会議 ～ ターミナルケアを考える ～

第1回は「死と向き合う」をテーマに、医療・介護・福祉に携わる関係者が、その活動の中から、また自らの経験から話し合いました。それぞれの「死」に対する気持ちを自分の言葉で語り合うのは初めてでした。第2回は、「在宅での看取りを考える」と題して、地域の開業医とのネットワークを作り、在宅医療に取り組んでいる医師からお話を伺いました。本人が在宅での最期を希望し、家族もかなえてあげたいと望んでいるのであれば、患者の身体面だけでなく精神面・生活面・介護者のQOLなど、総合的に診断していくケアマネジメントが最も必要とのことでした。



第3回となる今回は、藤沢のクローバーホスピタル院長鈴木勇三先生から「緩和ケアと地域連携」、そしてセントケア大船の富永由美子ケアマネジャーから「在宅での看取り～みんなで家族の思いに寄り添う」をテーマに事例を交えての報告がありました。

鈴木先生は、まず医療の現状から、入院の期間やベッド数の制限などの現実があり、更に在宅看取りを含む在宅医療推進の国の方針が出されていること。それによる在宅緩和ケアチームの必要性など、症例を交えて分かりやすくお話くださいました。

在宅ターミナルケアの目標は「家にいられて良かった」であり、そのためには「緩和ケア」は大切な要素である。その人がその人らしく「死」を迎えるために、患者を多職種で支える地域での連携は欠かせない、それは駅伝のようなものと例えて、鈴木先生のお話は締めくくられました。

富永ケアマネジャーからは、介護保険制度が始まる前から介護サービスでかかわってきた、ある90歳代の女性の在宅医療からその看取りまでの、5年間の報告がなされました。訪問診療、訪問看護のための話し合いをご家族と重ね、ご家族への身体的・精神的負担の軽減を図るなどの体制作りを大事にされたとのこと。主治医のサポートがあったからこそ、在宅での看取りを家族が選択できた。主治医をはじめ、関わる人たちが家族の思いに寄り添っていたことで、在宅での看取りにつながった。ケアマネジャーとしてどう関わるかを悩んだが、家族の思いに寄り添い、医療と家族の橋渡し役を担った。そして最後に、ご本人や家族とターミナルを支える医療や介護・福祉に係わる専門職側の思いが同じ方向を向いていることがとても大切だと話されました。

質疑では、ケアマネジャーから、相変わらずではあるが医療の敷居が高く感じられるとの意見があり、それに対し医療側から、お互い時間がない中で工夫しよう、FAXなどを利用して遠慮なく連絡して欲しいと前向きな姿勢が示されました。

己譚のない意見交換があり、今回で14回目を迎えたこのネットワーク会議は平成18年から継続して顔の見える関係作りを目指してきたが、これからの地域包括ケアシステムを構築する上で、「医療と福祉のネットワーク」が大きな意義あるものなのだと実感できました。

### 鎌倉市認知症地域支援フォーラム開催！

去る1月28日(土)鎌倉市福祉センターにおいて鎌倉市主催の認知症地域支援フォーラムが開催され、166名の市民や事業者の参加がありました。当日はリレー発表やパネルディスカッション、グループワーク等充実した内容で、参加者からは「これからの期待できる発表だった」「お互いに学びあう姿勢が大事」などの感想が聞かれました。



# サービス提供時における リスクマネジメントについて学ぼう！

～ケアをよりよく変えるリスクマネジメントとは！？～

今年度、支援機構では神奈川県より補助金を受け、多彩な事業を展開してきましたが、その一環として、平成24年1月25日(水)介護支援専門員や介護職員を対象としたリスクマネジメントの研修会を開催しました。当日は、社会福祉法人にんじんの会理事長で、NPO法人ケア・センターやわらぎの代表理事である石川治江さんを講師にお招きして、88名の参加者が熱心に受講しました。

リスクマネジメントには、事故を回避するための予防マネジメントと事故が発生してしまった後の対処マネジメントがあり、予防マネジメントで有効な方法としては「ヒヤリ・ハット」の活用があります。「ヒヤリ・ハット」とは、結果としては重大な事故や災害に至らなかったが、直結してもおかしくないような事例を発見する事で、ケア・センターやわらぎの各事業所では必ず「どきっと報告書」を書き、それに対しての「予防・是正計画書」を事業所内で検討する事によって、利用者の満足度を高めたり、サービスの質を均質化したり、同じクレームやミスを起こさないようにしたりしています。

また、対処マネジメントとは危機管理のひとつで、事故が発生してしまった場合、組織のトップは事件・事故への迅速な対処→原因究明→説明責任の遂行といった段階の意味を理解し、組織全体へ周知しておく必要があります。対処マネジメントの有効な方法として「事故報告書」があります。

ビデオを見たりグループワークをしたり、歯切れのいい講師のお話に引き込まれながら、和気あいあいとしたあっと言う間の2時間でした。今回の研修によりリスクマネジメントの基本的な考え方を学び、より質の高いサービスの提供に繋がればと思います。



## <<<移送さーびす・なび 鎌倉>>>発行！！

病院に行きたい、買物に出かけたい、孫の結婚式に参列したい、お墓参りをしたい、コンサートに行きたい・・・でも、公共交通機関を利用しての外出には不安がある。そんな時にサポートしてくれる事業所を紹介する冊子、『移送さーびす・なび 鎌倉』が発行されます。この冊子は、県の地域福祉（ともしび）推進助成金の事業として、当機構が平成23年度内に作成配付します。

移動困難な方の日常の暮らしが少しでも快適になるように作成された『移送さーびす・なび 鎌倉』を活用して、安心安全に外出して下さい。

お問い合わせは、支援機構事務局までお願いします。

